

令和 8 年度 静岡市 英語教育改善プラン

目標

言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する授業を目指す
～異なる文化を持つ人々と自信を持ってコミュニケーションをとることができ、地元への愛情を持ちながら国際的に活躍できる子どもを育てる～

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力 (パフォーマンステスト含む)
 ☐ 校種間連携
 ☒ ALTの参画 (専科教員含む)
 ☒ ICTの活用 (AIを除く)
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①外国語の授業では、積極的に相手と会話することができていると思う5,6年生の割合
R6:67.2%⇒R7:69.7%
(独自調査)

②授業中、ALTと英語でやり取りをしたり会話したことがあったと答えた5,6年生の割合
R6:66.4%⇒R7:74.4%
(独自調査)

未だ改善が必要な点

①英語が好きだと答える5,6年生の割合が平行線
R6:53.0%⇒R7:53.5%
(独自調査)

②ALTの先生と話をすることを通して、もっと外国の人と話してみたいと考える5,6年生の割合
R6:71.5%⇒R7:65.2%
(独自調査)

2. 要因分析

①小学校外国語専科教員研修を実施したことで、教員の指導力向上と授業の質の向上に繋がり、児童の授業への意欲、関心を高める手立てとなった。

②ALT研修会を年8回設定し、言語活動の在り方や改善点等を議題にしたことで、授業の中で扱う言語活動の頻度が増加した。

①英語のやりとりや発話量の不足が原因の一つとして考えられる。また、小学生の早い段階から英語学習の機会を創出し、英語学習への抵抗感をなくしていく必要がある。

②ALTだけでなく、姉妹都市やオンライン等を活用し、海外との繋がる機会を作っていく必要がある。

3. 目標を達成するための施策・事業

①②授業の充実

- ・専科教員とALTとの合同の研修会を実施し、情報共有と授業改善のための研修を行うことで、専科教員とALTとのチームティーチングの更なる質の向上を図る。
- ・各学校の授業の様子や取り組みをポータルサイト等に掲載していく。

①英語の授業以外で児童生徒が日常的に英語に接する機会の拡充

- ・イングリッシュデイを活用し、あいさつなど英語の授業以外でも英語を日常的に扱う取り組みを推進していく。
- ・英語AIアプリを導入し、授業外、家庭などで気軽に楽しく英語に触れる機会を拡充する。
- ・学校ではない場所で、ALTとゲームやクイズ等の活動を行うことを通して、英語に触れあう機会の拡充を図る。

②国際交流の活用

- ・静岡市の姉妹都市であるアメリカの3市と市内各校の交流を促進させるため、派遣教員がオンラインやオンデマンドでの交流の場をコーディネートし、国際交流と英語学習の機会を拡充していく。

令和 8 年度 静岡市 英語教育改善プラン

目標

言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する授業を目指す
～異なる文化を持つ人々と自信を持ってコミュニケーションをとることができ、地元への愛情を持ちながら国際的に活躍できる子どもを育てる～
○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R7：57.1％⇒R8：59.0％）

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他
（パフォーマンステスト含む）
（AIを除く）

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①英語を使って、自分の
思いや考えを、間違いを恐
れず伝えることができている
と思っている割合

R6:50.6%⇒R7:51.2%
(独自調査)

②CEFR B2レベル相当
以上の英語力を有する英
語教員の割合が増加

R6:51.1%⇒R7:53.8%

未だ改善が必要な点

①授業内外における、英
語学習のための生成AIの
活用をしている学校の割合

R7:42校中16校(38.1%)

②日本やあなたが住んでい
る地域のことについて、外国
の人にもっと知ってもらいた
いと思っている割合

R6:69.5%⇒R7:67.2%
(独自調査)

2. 要因分析

①静岡市独自の取り組み(イン
グリッシュデイ)による、日常場
面でも気軽に英語を話す場
面の設定が要因の一つである
と考える。

②英語教員への研修会や情報
共有のクラスルーム等を通
して、授業改善の意識が高
まり、教員の英語力向上に
つながったと考える。

①ICT(生成AI)の活用につ
いては、その有効な活用方
法や活用事例を得るための
研修の推進、また、実践経
験を積み重ねていく必要が
ある。

②姉妹都市提携を結んでいる
都市との交流を、オンライン
交流も取り入れながら促進
させていく必要がある。

3. 目標を達成するための施策・事業

①生徒が日常的に英語に接する機会の拡充

引き続き、生徒があいさつや英語の授業以外でも英語を使う日
(イングリッシュデイ)を学校ごと設定し、ALTと日常場面で気軽に英
語を話す場面を設定していく。

②教科研究会の実施

静岡市の教科指導における課題を解決することを目指した「教科
研究会」を実施し、事前に参集した中心教員を核として、静岡市の教
科の課題を解決するための研究や研修会の実施を検討する。また、そ
の成果を拡散していくことで、市内教員の専門性と指導力の向上を図
る。

①②英語教育用アプリの新規導入

一人一台端末を最大限活用するため、学習支援ツールと英語AI
アプリを全校導入をし、「生徒が自ら学習を調整する機会」や「生徒が
自ら進んで、楽しみながら英語に触れる機会」を創出することで、子
どもが主体的に英語に触れる環境を構築していく。

令和 8 年度 静岡市 英語教育改善プラン

目標

言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する授業を目指す
～異なる文化圏の人々と積極的にコミュニケーションをとることができ、グローバルな視野を持った子どもを育てる～
○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7 : A2以上51.5%、B1以上29.3% ⇒R8 : A2以上95%以上、B1以上60%以上) ✓

☒ 言語活動 ☐ 指導と評価の一体化 ☐ 教師の英語力・指導力 ☐ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☒ ICTの活用 (AIを除く) ☒ AIの活用 ☐ その他

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①CEFRB 1 レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が増加した。
(R6:25.1%⇒R7:29.3%)
- ②CEFRB 2 レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合が増加した。
(R6:84.2%⇒R7:100%)

- ①CEFRA2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が減少した。
(R6:58.2%⇒R7:51.5%)
- ②英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている学校の割合が目標に到達しない。
(R7:0% 目標100%)

2. 要因分析

- ①定期試験を廃止し、単元テストをこまめに実施することで生徒が計画的に学習するようになったと考えられる。アクティブラーニングを積極的に授業に取り入れ、言語活動を活発に行っていることも改善の要因と考えられる。
- ②AI を英会話の練習に活用するなど、AIやICTによって英語科教員の英語力向上が実現していると考えられる。

- ①英検などの外部試験の受験を生徒の自主性に任せているため受験者が少なく、「A 2 レベル相当の力を有すると思われる生徒」の客観的判断が困難になったものと考えられる。
- ②生徒の英語力に合わせた配慮や授業進度の遅延への懸念から、英語による発話の増加につながらないものと考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①生成AIの活用の推進
生徒が主体的に英語学習を行うため、積極的にAIアプリ等の生成AIを活用する。また、反転学習を推進し、授業のみならず家庭学習においてもAIを知識のインプットに有効利用する。DXハイスクール指定校においては、AIの利活用を進め、その効果を検証する。
- ②オンライン国際交流の推進
ICTを活用し、国内外の教育連携校とZoomなどを用いて生徒同士が英語でディスカッションする機会を増やす。その際英語教員が生徒の前でデモンストレーションを行うなど、教員の英語力の向上や維持にも国際交流を活用する。
- ① CEFRの目標の明確化
「卒業までにB1またはA 2 以上の英語力を有する」という目標を各校で校内目標として共有する。各種資格・検定試験とCEFRの対照表を用いてCEFR基準を浸透させ、取得に向けた具体的な学習計画を立てて取り組む。
- ②反転学習の推進
デジタル教材やAIなど用いた家庭での予習に重きをおく反転学習を取り入れることによって、授業では予習で得た知識をグループワークやロールプレイなどでアウトプットし、生徒・教員ともに英語で発話する機会を増やす。コミュニケーションをできる限り英語で行う授業を目指す。

静岡市教育委員会

		2023		2024		2025		2026		2027	
校種	指標内容	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		95%	85.6%	95%	58.2%	95%	51.5%	95%	95%	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		50%	23.2%	50%	25.1%	50%	29.3%	50%	50%	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		50%	43.5%	50%	60%	50%		60%	60%	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		50%	34.8%	50%	20%	50%		60%	60%	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100%	100%	100%		100%		100%	100%	
		公表（％）	100%	100%	100%		100%		100%	100%	
		達成状況の把握（％）	100%	50%	100%		100%		100%	100%	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		100%	83.3%	100%	84.2%	100%	100%	100%	100%	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		95%	26.1%	95%	40%	95%	0%	100%	100%	

		2023		2024		2025		2026		2027	
校種	指標内容	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		50%	56%	57%	55.2%	58%	57.1%	59%	60%	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		90%	63%	90%		90%		90%	90%	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		85%	80%	85%		85%		85%	85%	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100%	100%	100%		100%		100%	100%	
		公表（％）	100%	48.8%	100%		100%		100%	100%	
		達成状況の把握（％）	100%	55.8%	100%		100%		100%	100%	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		50%	49%	50%	51.1%	51%	53.8%	52%	53%	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		95%	61.4%	90%		90%		90%	90%	

		2023		2024		2025		2026		2027	
校種	指標内容	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100%	90%	100%		100%		100%	100%	
		公表（％）	70%	59%	70%		70%		70%	70%	
		達成状況の把握（％）	80%	75%	80%		85%		90%	95%	